



263

講談社現代新書

性格



性格は、私たちの内にあり、
私たちについてまわる。

が、自己の性格も、他人の性格も、
的確に語り得るものはいない。

性格にはどんな型があるか、

性格はどのように形成されるのか、

相手の性格を理解するとき

留意すべき点は何なのか……

本書は、身近で、大切な問題でありながら、

複雑でとらえどころのない性格について、

正しく深い知識を与え、人間理解の指針を示す。

詫摩武俊

性格

一九七一年一〇月二四日第一刷発行 一九九三年十二月七日第四九刷発行

著者——詫摩武俊

© Taketoshi Takuma 1971 Printed in Japan



発行者——野間佐和子 発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽二丁目三—三 郵便番号二二—〇一

電話(編集部)〇三—五九五—五三二 (販売部)〇三—五九五—五六六 (製作部)〇三—五九五—三六五

装幀者——杉浦康平＋辻修平

印刷所——豊国印刷株式会社 製本所——株式会社大進堂

ISBN4-06-115663-2 (定価はカバーに表示してあります)

本書の無断複写(コピー)は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
なお、この本についてのお問い合わせは、学芸図書第一出版部あてに願います。

詫摩武俊



性格

講談社現代新書

まえがき

自分や他人の性格について考えるのはつぎの二つの場合であると一般には言われている。一つは、何か思い通りにいかなかったり、意外な結果になってしまったときで、このときには相手や自分の性格に原因があると考えられがちである。もう一つは、気持ちの上でゆとりのある場合で、自他の性格の特徴やその違いについてあれこれと考えが展開する。実際、すべてが思い通りにいっているときには性格のことなど考えないし、人数だけ揃えば十分だというようなところでは、そこに集まった人物の性格は考慮されない。

しかし、医学についての知識が病気の予防に役立つように、性格に関してもう少し深い知識をもっていれば、世の中の摩擦はもっとと少なくなるのではないだろうか。もちろんトラブルは性格の問題だけから起こるものではない。しかし、性格について知っていれば、相手に期待してはならぬことを期待して失望したり、相手の気持ちを理解し損ってしまふことがずっと少なくなるように思われる。性格はいつもその人の内にあり、その人について廻るものである。そして、性格の違いはものの見方、考え方、人に対する態度など生活の広い領域にわたって現わ

れる。

「性格という言葉からどんな感じを連想しますか」と聞いてみると、硬いものを想像する人がいる。個人の中にあるしんのようなものかどうかと言うのである。個人の行動に見られる一貫した傾向のことを性格と言うのであるから、このように硬く変わりにくい傾向のことを性格と結びつけて考える理由はある。そして、確かに一本の赤い糸のように、その人の生涯を通して変わりにくい特徴もある。しかし、また性格は時間が経過し、経験を重ねていく途上でかなり変化していくものでもある。少なくとも石に刻み込まれた文字のように変わりにくいものではない。性格は固定した客観的なものとして観察できないからこそその理解は難しく、いろいろの行き違いや誤解を生ずるのだとも言える。このように複雑でとらえどころのないものではあるが、性格の問題を離れては人間の社会生活を理解するのは困難である。性格はどう研究されてきたか、性格にはどんな型があるのか、性格はどう発達するものか、相手の性格を理解するとき留意すべき点は何なのか、というような点を中心に書いたのが本書である。講談社の福田信宏氏には企画の段階から刊行にいたるまでいろいろとお世話になった。深く感謝する次第である。

一九七一年九月

詫摩武俊

目次

まえがき…………… 3

第一章 性格と人間関係…………… 9

〈1〉 性格と人間関係 10

〈2〉 性格はどう研究されてきたか 19

〈3〉 性格の定義 24

〈4〉 性格・パーソナリティ・気質・個性 26

第二章 性格の基本型…………… 33

〈1〉 性格の種類 34

- 〈2〉 開放的で社交的なZ型 37
- 〈3〉 非社交的で生まじめなS型 48
- 〈4〉 がんばり屋で融通のきかないE型 59
- 〈5〉 華やかで嫉妬深いH型 65
- 〈6〉 敏感で内省過剰なN型 72
- 〈7〉 自信に溢れ自己中心的なP型 77
- 〈8〉 類型論に対する批判 81

第三章 性格の発達を左右するもの……………89

- 〈1〉 性格はどのようにつくられるか 90
- 〈2〉 生物としての人の特殊性 93
- 〈3〉 家庭環境 98

- ＜4＞ 親の育児態度 102
- ＜5＞ 親の育児態度を規定しているもの 107
- ＜6＞ 性格形成のその他の要因 115
- ＜7＞ 性格の身体的基礎 119

第四章 性格を中心に見た発達過程……………127

- ＜1＞ 乳児期 128
- ＜2＞ 幼児期 135
- ＜3＞ 児童期 143
- ＜4＞ 青年期 153
- ＜5＞ 成人期 163
- ＜6＞ 男らしさ・女らしさ 168

第五章 他者の性格の理解……………

181

〈1〉 共感性とそのテスト

182

〈2〉 共感能力を高めるために

189

〈3〉 性格の判断を誤らせるもの

195

第一章 性格と人間關係

＜1＞ 性格と人間関係

性格は身近な問題

人は自分自身の性格について五分や十分は容易に語り得るであろう。自分や他人の性格はまた話題にされやすい問題である。「ぼくはどうも内気なもので」とか、「あの人は虚栄心の強い人だから」と、自分や他人の行動の理由を性格に求めることもしばしばである。

また、銀行や会社の入社試験のように人を選択するときにも、その人の性格は、学力や特技などとともに重要な考慮の対象になる。

人は自分の親や子を選ぶことはできないが、配偶者や友人は多くの可能性の中から選ぶことができる。そして、「自分はよい妻をもって幸せだ。よい友人に恵まれてよかった」と思っている人は、相手の性格と自分の性格が好ましい関係にあることが一つの大きな条件である。好ましい関係にあるということは必ずしも二人が似ているということではない。また単純に相補うような関係にあるということでもない。好ましい関係にあるということは、自分は相手に受容され、相手を自分が受容しているということが基底にあって、自然の無理のない関係が維持

され、その人とともにあること、その人とき合うことが楽しいとか愉快だというプラスの感情を心の中にひきおこすような間柄である。このような調和感のある安定した関係は、誰に対しても持ち続けられるものではない。一度や二度の顔合わせで済む間柄なら意図的に社交的に振る舞い、自分と相手とのあいだに気まずい空気がつくられることを避けることはできる。しかし、努力して好ましい関係をつくろうとした後にはずっしりとした心理的な疲労感が残る。無理に努めなければ維持できない人間関係というものは本来長続きもしないし、発展性もないものなのである。

幸・不幸を 職場の中にはどこことなく冴えない顔つきをした人が一人や二人はいるものである。決定する

る。この人たちは良心的にまじめに勤めているのではあるが、その人自身の気分には安定性がなく、不平や不満の種をいろいろともっている。この人たちとは対照的に、顔の色も生き生きとして充実感があり、明るくのびのびと振る舞っている人もいる。両者の差の由来するところは個人的問題や健康の問題などに帰せられることもあるが、その本人とまわりの人々との現実の人間関係が、うまくいっているかいないかに左右されることが多いのである。

性格が合う、合わないという問題は、少し極端に言えば、その人の人生の幸・不幸を決定する問題でもある。

性格の知識は まだ不充分

近年、大きな企業体の職場は非常に改善され、快適に能率よく仕事ができるようになった。事務用品も便利で、清潔なものがつきつきと考案され、厚生施設も整って、働くことによる身体的な疲れは二十年前とは比較にならないほど少なくなったはずである。しかし、心理的な疲れはどうだろうか。人間関係についての悩みは減っただろうか。部下に無理解だと思われる上司はどこにでもいるし、使いにくくて堪らないと上司を嘆かせる部下も決して少なくなっている。職場の不満を訴える人は男性にも女性にも多いし、人との問題で頭を痛めている人もよく見かける。

確かに性格テストは以前に較べてよく用いられている。しかし、その多くは採点された結果が人事課の倉庫に眠っていたり、あるいは逆に、テストの結果を過信して強引な人事配置をしがちであって、個々の人をよく活かすという本来の目的に添っていないことがよくある。

また、専門のカウンセラーを常置してさまざまな不満の解決に役立たせようとしている会社もある。そして、それはもちろんそれなりの成果はあり、とくに使用者側ではその成果に満足している場合もある。しかし、それにもかかわらず、他人と自分との関係や自分の内部の問題について不満をもつ人は、若年層にも年配層にも多いのである。

このような不適合感、あるいは異和感の少なくとも一部は自分あるいは他人の性格について

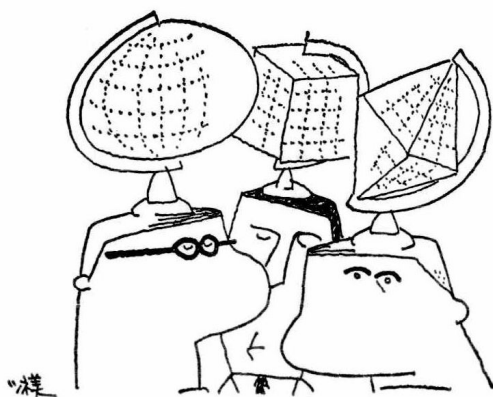
の無知に基づくものである。企業体内部の機構が近代化されたり、能率的な事務用品が導入されても、性格についての知識はまだまだ一般化されていないのである。

さきに私は、「人は自分の性格について五分や十分はしゃべれるであろう」と書いた。性格の問題は日常的な問題であるから話題にはなりやすい。しかし、各自が正しい、あるいは標準的な知識をもっているとは限らないのである。

これだけ意見 性格についての知識がいかに幅の広い個人差をもっているかを示す例を述べの差がある よう。

かつて私は大学生に、「性格を表現する形容詞を十分間に書けるだけ書いてみるように」と言ったことがある。明るい、親切、非社交的、あきやすいなどという言葉をたくさん思い出して書けばよいのである。その結果、平均は五〇くらいになったが、ある人は一五〇も書いた。ある人は三〇くらいしか思いつかなかった。

また、こんなことを尋ねてみたこともある。「性格には遺伝によって決定される面もあるし、環境によって決定される面もあるが、かりに一〇〇という数を両者に配分するとどんな比率になると思うか」という質問である。質問自体が非常に乱暴であるが、ある人は「遺伝が一〇で環境が九〇」と答えた。またある人は「遺伝が七五で環境が二五」と答えた。平均すると遺伝



人それぞれに認知の世界が違う

が四〇、環境が六〇くらいというところになるが、性格はどのようにしてつくられるかという問題についてもこれだけの意見の差があるのである。

性格が違えば
世界観も違う

性格というのはその人にいわば内在するものである。性格

が違えば、人の好みも違うしものの受け取り方も相違する。しかし、このことは実際にはあまり気づかれないのである。

少し遠廻しに説明しよう。たとえば、ここに少々目の悪い人がいるとする。度の合わないメガネをかけている人でもいい。彼の毎日見ている世界は、目のいい人の見ている世界とは違って、全体としてぼんやりとしたものとして把握されている。耳の不自由な人の聴覚的世界も一

般とは違っているし、背の高い人が認知している世界と、背の低い人の認知している世界も同じではない。この際、大切なことは、それぞれの人が自分の感覚器官や身体的特徴を通して把握している外部世界の特徴を自覚しているかどうかということである。具体的に言えば、目の不自由な人が自分にはこのように世界は見えているが、一般の人はもっと別の見方をしているのだという事実を知っているかどうかということである。

感覚器官の場合は、その個人の特徴を自覚している人が多い。それは、第一に、一般の標準とか健康体というものがあってそれとの比較が簡単にできるためであり、第二には、このことと関連して自分のもっている世界像の誤りが簡単に指摘されて、そのずれを認めないわけにはいかないからである。自分にはその物は見えないといっても、ほかの幾人かが見えると主張してその物体の特質などを説明し始めれば、なるほどと納得せざるを得ないのである。

「社交的」か
「軽薄」か

性格の違いはもっとはるかに複雑である。ある会社に、Aという几帳面で気のたとする。二人がCという新入社員を見て、Aはまじめで誠実そうな男と判断し、Bは融通のきかないバカものという印象をもった。どこの会社でもよくある問題である。

人は、自分が判断し評価したように相手はあると考えがちである。人によって見方は違うの